埼玉純真短期大学研究論文集　第５号　PP.1-16

人間科学・進歩（化）学としての「こども学」，あるいは「世界変革論」
－「新しい科学」のための文系の側からの「文理融合」について －

The child studies as a human science, a evolution science, or the world revolution theory.
－ Fusion of humanities and sciences from the side of the humanities －

入　江　良　英
（こども学科　教授）

要旨　本論では，人間科学・進歩学としての「こども学」について考えてみた。「こども学」は，人間の進化・進歩と関連付けさせなければならないし，それは当然,「世界観の変換」「世界変革」を導くことになるのではなかろうか。またそのためには，新しい能力を要請しかつ養成する「新しい科学・学問」が必要になるだろう。「総合的人間科学」「学際・環学」が重要と言われつつも，現在の多くの高等機関の体制においては，それは絵に描いた餅にすぎないのではないか。以上，学問の現状を改革するための認識論的処方箋が，以下述べられることになる。

【キーワード：進化（歩）学　新しい科学　文理融合と解釈学　重層的構造主義　子育て支援と女性学**】**

Ⅰ．真のポストモダン（脱近代）を求めつつ

精神と物質を分離する「二元論的世界像」は，主体と客体，あるいは主観と客観の対立図式として，多くの思想家たちの頭を悩ませてきた。しかし，われわれの身体においては，精神，肉体ともに全体として息づいているのであり，この両者は，相互不可分の関係にある。

「近代的合理主義」は，明確な事実に絶対的な根拠を置くことによって，近代科学の精神的な基礎とした。それは世界を構成する事実の間には，単線的なおよび不可逆的な因果の関係があるとする確定に基づいており，それゆえ，一意的な数学的な演繹（「線形的な因果の思考法」）によって無限に補足が可能であるとされたのである。

また近代主義は，先鋭すぎる「二分法」をもって,「天と地」,「善と悪」,「男女の分業」,「上と下」等など，人間の生活世界の感覚をも支配している。このような二分法は，必要な認識方法であるが，しかし，これを敢えて相対化しつつ，たとえばより高次の「善」・「男女の分業」などを求める,「媒介（中間）態度」が求められているのではなかろうか。

それはポストモダンとは名ばかりの呪術的な「プレモダン（前近代）」ではなく，あくまで「モダン（近代）」を超克した「真のポストモダン（脱近代）」でなくてはならないだろう。

Ⅱ．「俯瞰型研究プロジェクト」としての人間科学
日本学術会議の新しい指針

第18期日本学術会議の期初の定期総会（第134総会）において，期の活動計画として,「人類的課題の解決のための日本の計画Japan Perspective」の提案,「学術の状況および学術と社会との関係に依拠する新しい学術体系」の提案の二つの課題を設定した。

さらに分化会では,「俯瞰型研究プロジェクト研究理論」分科会,「価値選択の合理的根拠」分科会,「科学論のパラダイム転換」分科会,「大型科学計画」分化会,「学術研究の評価基準」分科会などが設置された。これらの分化会の名称を見ても,従来の「専門分野」を専守防衛しようとしたり,あくまでも「価値中立」も求める「近代主義的な学問観」が限界をもっていることは明らかであり，そのための対策としては上記のような主張が展開されているが，日本の学会の現状を見ると，なかなか変革が進まないのは，日本の学会の現状を見ている者には否定しえない事実である。以下,「要約」で述べた論点を展開していくことにする。

Ⅲ．人間科学としての「進歩（化）学」

３－１　進歩（化）学としての「脳・思考の研究」（主に自然科学の側から）

「脳のはたらき」のテーマとして,（１）.「連合」,モジュール間のフュージョン,（２）. アナロジーの問題,（３）. 隠状記憶,（４）.「脳相似型」の社会,（５）. 脳の創発説とターミナル説,（６）. 司令塔としての「前頭前野」,（７）. 多層性の脳,（８）. 想像性（創造性）の問題（「拡散的思考」と「収束的思考」),（９）.「直観」の問題などが挙げられる。

「脳のはたらき」について，まだよく解っていないことの中に，まず,（１）「連合」の問題がある。たとえば情報技術において，各モジュールは技術でつくれても，人間の情報処理の場合はというと，何らかのやり方でフュージョン（融合）されているが，その場合の仕方が実はよくわかっていないのである。また（２）アナロジー･推論においても,「コップをもってきてください！」と言われて,「はい持ってきます」という時，物理的なこのコップというのではなくて，何か飲みたいから持ってきてもらいたいわけですから，コップの「機能」の方が問題になる。この機能に関するアナロジカルな推論というのが，なかなか難しい。

「アナロジー」とは，以下のものである。＜１＞学校教育をまったく受けていない就学前の子どもでも，アナロジーを利用して推論するという能力を身につけている。＜２＞アナロジー的思考は，目標によって導かれる。目標はアナロジーを引き起こす。しかし，そのアナロジーが新しい目標を生成してアナロジーの使われ方を変えていくこともありうる。＜３＞子どもは，大人から与えられる単なる報酬や罰よりも，自分の内的な基準に基づいて，自分の創り出したアナロジーを評価する。＜４＞評価は，複数の解釈の間に生じる，ある種類の競合を基礎にしてなされるという側面がある。

（３）「隠状記憶」についてであるが, 最近の「認知心理学」の中で，インプリシット･メモリー（隠状記憶）というのがある。認知心理学の「記憶の実験」などでは，たいてい，意識して，こういうことを記憶しろといって記憶させて，後でどれくらい思い出したかということをやる。そういう記憶の仕方だけでなく，サブコンシャスのところで，記憶というのは，かなり働いていて，そういうのを拾い上げると，脳の能力というのは，旧来の認知心理学で言われているものよりも，ずっと大きい可能性がある。それを考慮して，しかも生物として,「今まで進化してきた脳の情報処理的な可能性と限界」というのを明らかにする必要がある。コンピューター・メタファーとかでやっていては，矮小な感じがする。

実は，この「隠状記憶」の問題は，ずっと「深層心理学」がやってきたことである。

たとえば，フロイトは，次のような興味深い想定を行う。生命をもった有機体をできるだけ単純化して, 刺激不能な物質からなる未分化の小胞（表面を膜でもっておおわれたもの）のようなものとして想像する。ここで表面の膜の外界に向けられた部分は，脳灰質の灰白部に相当するものであるが，外界からの絶え間ない外的刺激の衝動によって表層の物質は，たえず変化を受けるのに対して，深い層ではそのような激しい多様な変化にはさらされない。「＜意識＞体系では興奮過程は意識されるが, 持続的痕跡は残さない」という, この特徴を, フロイトは「意識は記憶痕跡のかわりに（その場所）に発生する」という命題として表現している。

ユングは，＜１＞「意識」,＜２＞「個人的無意識」,＜３＞「普遍（集合）的無意識」を以下を次のように定義する。

＜１＞意識（省略),＜２＞個人的無意識：これは第一に，意識内容がその強度を失い，したがって忘れてしまったか，それとも意識がそこから退いたために,（抑圧）無意識になってしまった一切の内容から成り，第二にその強度が弱すぎたために，意識には到達しなかったけれども，なんらかの方法で，心の中に進入したその内容であって，部分的には感官の知識からなるもの。＜３＞普遍（集合）的無意識，これは表象可能性の遺産（遺伝質）として, 個体的ではなく, 普遍（一般）人類的, 否, 普遍動物的でさえあるもので，個体的に心的（こころ）なものの本来的な基礎となるものである。人間の脳は高度に発達していて，その中には,「太古の大昔から生き生きと伝達されてきた自然的歴史」が含まれている。

（４）「脳相似型」の社会，これは，脳と相似（アナロジカル）な方向で，どうやら社会がつくられているという推論である。「唯脳論」的な考えである。

（５）脳の「創発説」とターミナル説，創発説：ニューロンの数を一つずつ増やして，それらをつなげていくことにしよう。これら新しく加わったニューロンが，新しい機能を果たす能力を系統にもたらすことは明らかである。すなわちニューロンが，付け加わるにつれて，新しい性質が徐々に発達していくかもしれないし，あるいは「複雑系の創発的現象」として突如出現するのかもしれない。つまり，系にニューロンを加えていくにしたがって，創発的性質が連鎖のように現れると考えられる。

ターミナル説は，意識は脳とまったく独立したものであるという考え。われわれの脳は，意識に通じるターミナルであるというもの。

（６）司令塔としての「前頭前野」,「前頭前野」は，各部位を総合的に使いこなす総司令官である。また他人とのコミュニケーションをとる上でも重要な役割を果たす。「感情」や「意欲」を司り，ものごとを「推測」したり,「考察したり」，何かを計画を立てて行う際の主役である。他人の意見に耳を傾け「分析」し，自分の意見を組み立てるのも,「前頭前野」の努めである。パソコンでいえば，ＯＳ（基本ソフト）にあたり，まさに「脳の中枢」とよぶべき存在が「前頭前野」なのである（「大脳基底核」という説もある）。

人間とチンパンジーの遺伝子には１％以下の違いしかない。ところが「前頭前野」に限れば，両者は600ｇも違う。チンパンジーの「前頭前野」が，50ｇなのに対して，人間のそれは600ｇもある。人間とチンパンジーの違いは，まさに,「前頭前野」の発展度にある。

（７）「多層性」の脳，現実の脳は，長い進化の果てに形成されてきたものである。すなわち，まず，神経細胞が形成され，その神経細胞を使う以上，その塊で神経節のような集合体を形成するか，あるいはそれを並べて層状構造をつくるか，といったことしか考えられない。そのように並んだ神経細胞が多数の突起を出して，神経細胞間に複雑な結合を発展させるようになった。

そのように考えると，必然的に多層性の並列分布型の情報処理をするような回路しか形成されようがない。そのようにして形成されてきたため，脳の最終的な構造にはその計算原理に対する大きな拘束条件が含まれている。

（８）想像性（創造性）の問題（拡散的思考と収束的思考），意識が現実を超えるときに，想像力の発現を最もはっきりとらえることができる。あくまで現実を目にしたときに，自分の経験，既有の知識や枠組みなどを呼び出して関係付け，ある形として構成したものを見ているのである。だからこそ，想像力のはたらきが不可欠になる。心象（イメージ）や心象形成作用は，心象をつくり出して経験する過程であり，想像力の一形態をなしている。しかし想像力はそれにとどまらず，言語的なもの，非言語的なものを含めて多種多様なシンボルをまとめあげる働きをなしている。しかし想像力には，新しいものを生み出す創造的なものと破壊的なものがあり，破壊的な想像力は，人間の生命を脅かすものとなる。高次の「メタ想像力」というもので，統制する必要があるであろう。

ウェスト（West,T.G）は，『天才たちは学校が嫌いだった』という著作の中で,「専門家の戦略」を追及していくと，やがて「全体感覚」は，どんどん薄れていく。そして自分の分野を知る人は多いが，全体がわかる人はほとんどいない。専門家は多いが，賢明な人は少ないと述べている。[(1)]

彼のユニークな主張を箇条書きにすると，＜１＞物理，工学，政治，文学などの領域で，もっとも独創的な人々の何割かは「視覚思考」に強く依存していて，言葉や数字のかわりにイメージを用いている。＜２＞視覚的才能には言語的障害が伴う。＜３＞視覚的・空間的モードは，複雑な問題を扱うのにうってつけで，芸術ばかりか，科学の創造的成果に密接な関係がある。＜４＞「複雑な系」の問題は，天賦の才能をもつ視覚型の人間がもっとも得意とする。＜５＞きわめて複雑な問題の吸収と理解にもっともふさわしい人々は，伝統的教育システムの低いレベルで大きな障害をもつことがある。＜６＞伝統的システムは，極端に尊重すると弊害の出る技能（速読,詳細な事実情報の想起,速い正確な計算，計算力，ルーティンな数値データの前後的解釈）を奨励しすぎて，経済や社会が根本的な変革を伴う際に必要とされる（視覚的モードを使った）深くより基本的な学習を得意とする人物の出現を，系統的に排除しているかもしれない。以上の考え方は，けっして「右脳重視」を導くものではないだろう。要は，芸術家は，数学や統計の本質をイメージで学び，数学者たちは，イ

メージの本質を数値分析で学ぶということである。

日本人は,「集団・間人主義」を重んじてきたゆえに,教育場面においても「収束的思考」(分析的)を重視し,「拡散的思考」(思考・インスピレーション)を重要な要素とする「創造性教育」を集団のまとまり,構造を崩すものとして,どちらかといえば軽視してきた。

だが,変革期としての現代は,「創造性教育」を必要不可欠なものとせねばならない宿命を負っている。

創造性教育は,単に新しさ・独自性を求めるだけでなく,文化が従来のいかなる段階よりも高次の段階に到達するための現実問題を解く鍵として,つまり,「伝統と創造の止場」=「進化(歩)」のために進められるべきである。

まずは,「創造性」を高める「イメージ重視」の教育を日本人は検討すべきである。教育界のさまざまな批判はあるにしても,「総合科」「学際」の試みは,教育のあらゆるステージ・段階で推し進められるべきであろう。これは,離散した周知の知識の間に「新しいネットワーク」,斬新な関わりを生み出す「統合的能力」を意味するが,このような学習や指導には莫大なエネルギーと幸運がいるであろう。

(9)「直観」の問題,古代ではプラトン,近代ではスピノザ,ニーチェ,20世紀ではベルグソンといった哲学者たちは,理性や感覚によるデータを超えた「直観」という,「より高次な知の形態」があることを指摘していた。

また数学や論理学の分野には,「直観派」ともいえる学派があり,心理学においてもゴードン,オルポート,マズロー,ユング,ブルーナーら,直観の重要性をよく認識する学者たちがいる。しかし一意的な「近代科学」の輝かしい成功のために,先鋭すぎる「合理性」が蔓延し,「直観」は,認識上,重要な役割を負いながら,見向きもされなかった。科学的認識方法は,「一意的な近代科学」を超える段階(ステージ)に達したといえるだろう。そして,その際の試金石こそが,「直観」の扱いといえる。

小学校から大学院まで,そして実社会においても,思考・問題解決・意思決定に際して,われわれは未だ,「近代主義的な科学主義のモデル・パラダイム」模倣するように求められている。再三のくり返しになるが,真の「脱近代(ポストモダン)」の状況においては,「新しい進歩(化)」のためには,このような状況が打開されねばならないだろう。

3－2　進歩(化)学としての人間科学(主に人文・社会科学の側)から

3－2－1　新しい「科学」(Wissenschaft)とは何か。

ここでは,主に,人文・社会科学について述べるが,その前に,一般的にそもそも新しい「科学」(Wissenscaft)的思考法とは,何を意味するのであろうか。それは人文・社会科学のアイデンティティを確定する上で,それは重要な試みとなるであろう。

量子力学の祖であるボーアは,「科学は自然と人間の無限対話の中から生まれ出てくる,そのつどそのつど,表現方法を変える対話の形式にすぎない」と言っているが,まさに「科学」という言葉の意義が,近代的なものから,プレ近代に戻ることなく,「真の意味でのポスト近代」へ至らなければならない。そのような「ポスト近代」を導く上で,不可欠なものとして,「近代科学」と「臨床的知」の対比があるといえる。中村雄二郎は,「近代科学」＜1．普遍性　2．論理性　3．客観性＞,「臨床的知」＜1．コスモロジー(固有世界)2．シンボリズム(事物の多義性)3．パフォーマンス(身体性を備えた行為)＞という説明を与えている。

この両者を上手に融合させることが,「新しい科学の成立」に役立つのではないか。また,「意識研究」も,「新しい科学」の場となりえるだろう。

「臨床的知」(たとえば,フロイト,ユング,心身医学の祖であるヴァイツゼッカーなどの研究)も,「意識の情報処理研究」や「脳研究」との対比(果たして,「無意識」とは,脳の構造上,何を指すのか等)を通して,日本の臨床的知の「対抗同一性」にかかわりすぎる呪術性も払拭されることになろう(つまり,「母権性社会日本の病理」の克服)。

3－2－2　人文・社会科学は,自然科学と対等である

科学研究者の中には,自然科学は,人文・社会科学の上にたつ,優位に立つと考える人々がいる

ことをまず指摘しておこう。しかし，以下のように考えるものもいる。

エドワード・O・ライシャワーは，『知の挑戦』の中で，

「本来の啓蒙主義が提示したものは，客観的な証拠によって，よりわけ自然科学からの証拠によって次第に支持されてきている」(2) と主張し，自然科学と人文・社会科学の収斂は実際にはじまっており，両者の掛け橋としては次の四つがあると述べている。(3)

＜１＞一つは，「認知心理学」の要求をもった「認知神経科学」あるいは「脳科学」で，精神活動の身体的基盤を分析し，意識的思考の謎を解くことを目的としている。

＜２＞二つめは，「人間行動遺伝学」で，現在は，精神発達に及ぼす遺伝子の偏向的な影響を含めて，人間行動の遺伝的基盤を細かく調べるという初期段階にある。

＜３＞三つめは，「進化生物学」で，社会生物学の雑種も含み，社会的行動の遺伝的起源を説明する研究を既に開始している。

＜４＞四つめは，「環境科学」である。この分野と社会理論とのつながりは，一見すると希薄に思えるが，そうではない。自然環境は，人類が進化した舞台であり，その心理や行動は，自然環境にみごとに適応してきた。人間生物学も社会科学もこの堅固な枠組みを世界観にくみこまない限り，完全なものにはならない。

また，きわめて興味深いものが，「散逸構造論」でありノーベル化学賞を受賞した科学者であるプリゴジンの所説から発展させた「自己組織論」がある。これは，不安定で進化発展していく世界と理想化された静的世界との二者択一を乗り越えるものである。微視的な「個」の自由な振る舞いから生まれる自由な巨視的なレベルでの「進化発展的過程」こそが，秩序形成の源泉であり」その現場であるという事実および「個」の自由が真に生かされるのは非平衡状態から生成される「創発的秩序」の中においてのみであるという事実に，ともに立脚せねばならない，という主張である。これは原理的には，きわめて正しいものといえよう。

澤口俊之も，子どもとはどういうものか。人間の幼児期が長いのはなぜなのか。母親と父親はどんな役割をもっているのか。人間の心とは何なのか。そのような人間の「生物学的な本質」を踏まえた上で，教育論をくみたてる必要があると主唱している。この主張も正当なものである。

しかし，この論文では，あくまで「文科系からの文理の融合」をあくまで目指している。なぜそれが必要なのであろうか。

人間が進化・進歩するということは，きわめて困難な問題ではあるが，切実な問題といえよう。たとえば，進化を「化石人類学」あるいは「脳の機能分化」で研究することも，重要で有意義なことと考えるが，これはあくまで，どちらかといえば，「進化・進歩の後からの説明基礎付け」であると考えられる。「進化・進歩」とは，まさに今ここで問題になっているわけであり，そういう意味では，「文化学・精神科学（ドイツ的にいえば，Geisteswissenscaft)」的考え方の重要性もある。未来のために，ある選択をする場合に，「意志・価値・善と悪」など等の概念は，その意味では避けることのできない概念ではないか。

問題は，スノーも指摘したように「文科系」「自然科学系」が二つの交じり合わない異なった文化として存在することだと考えられる。

Ｊ．ハックスリーは，進化をもたらす仕事・行為の困難さについて次のように述べている。(4)

「難しいのは，それぞれ一段ずつの人間の歩みが，まさにどのようにして，もたらされたかを発見することである。望ましい劣化と望ましくない変化を区別し，制限をもたらす改良と制限をもたらさない改良を区別することになるとさらにむずかしい。」

３－２－３　文化系科学（学問）の基礎的方法論としてのＫ．マンハイムの「解釈学」

「解釈学」（hermaneutics）一般の歴史は，古くにまでさかのぼれるが，これは，「文科系科学（学問），Geisteswissenschaft」の基礎学」と称せられるべきものである。

Ｋ．マンハイムは，『世界観解釈の理論への寄与』（1921-22）において，「客観的意味」，「表現意味」，「表示的意味」の三つの意味の層を呈示した。マンハイムは，前著の中で，「喜捨」という行為を例に挙げて，これら三つの意味を簡略に説明してい

る。[5]

まず,「客観的意味」とは,「喜捨をする」という客観的行為そのものを示す。次に「表現意味」とは，たとえば「この喜捨は，善意から行われたものである」という主張がなされていることを示す。

そして最終的に,「表現意味」において，その主張の是非が,「実体的直観」によって解釈・検討され，それが真の意味で「偽善的な喜捨」であったか「真の喜捨」であったか等が示されることになる（もちろん現実はもっと複雑なものかもしれないが)。

実は，学問・科学に決定的に欠如しているのが，この「表示的意味」の直観・体験に基づいた「価値判断」ではなかろうか。

「表示的意味」をさらに理論的に説明するなら，

「ある心情生活の時間の中で繰り広げられる現実化が問題ではなく，作品のなかにしか現れない創造主体の形態，性格，実体的な本質こそが問題となる」ものである。

この表示的意味主体においては,「意味的な体験ではなく，純存在論的な無媒介的な体験といったものが, もう一つ現存していなければならない（物自体)」。

また,「理論的現実」に対して最終的に充実をもたらすのは,所与のものをとらえる「直観」であり,「表示的なものの無媒介的な現存」である。

ゆえにマンハイムにとっては，個々の客観化物のなかに，そのつど現れる「表示意味」を直観でいかに集めてくるか，そしてそれらを，客観的な意味および表現意味といかい整合させるかということが,「解釈」の最重要事項となった。

以上の「表示的意味」「体験」『実体的直観』を最重要視するなら，マンハイムの解釈学は，他の，たとえば,「現象学的解釈学」や「言語学的解釈学」などへの鋭い批判にもなっている。

３－２－４　学問（科学）は「重層的構造主義」の性格をもつ

次に，マンハイムの社会哲学的思想を基に，学問(科学)の構造主義的性格について述べてみよう。

マンハイムは，人類が未だ明確には把握できない「新しい内容」が出現した現代では，前時代とは違い,「新しい形而上学的な視点」から「構造分析」を始めなければならないと主張する。[6]

マンハイムは, ハンガリー時代の初期の著作『魂と文化』（1918）のなかで,「構造分析」において，現実的なものを形而下的に把握しようとする方法が，偏狭的なものであることを悟ったが，同時代人であり，協力者であるザライが,「後期カント派という回り道」をしながら,「構造直観」という体験を深めたことに見習い，自分も倫理学，美学認識論，哲学および美術の特別な所与性と構造を分析し始めた」[7] と独白している。

このようなマンハイムの構造主義で重要な役割を果たすのが,「ゲシュタルト（形態)」であろう。これは，混沌たる「欲動」と「厳格な秩序を欲する意識」とを媒介しようとするもので,「物体の水準」においても,「物自体の水準」においても認められる。

詳細なゲシュタルトの証明は，他所にゆずるとして，ここではマンハイムのゲシュタルト論について考察してみよう。

まずマンハイムは,『世代の問題』という著作の中で，以下のように「ゲシュタルト」について述べている。[8]

「ある対象的知覚とその論理的言語表現は，単にたまたまそれを志向した個々の孤立した個人にとってのみ存在するのではけっしてなく，その背後に立つ社会集団にとっても存在している。つまり，ある対象を部分的に圧縮させながら，部分的それを充実させるこのゲシュタルト的把握は，その対象が右に指摘した歴史的・社会的集団にとってもつ意味に対応した方向に向かってなされるものなのである。いいかえれば，われわれは，つねにある特定の，すでにできあがっている形態のなかで，諸対象を見，またある特定の脈絡のなかで諸概念を考えているのであって，観察と思考を決定する枠組みは，それぞれの場合にわれわれの背景をなしている集団によって与えられているわけである。」

したがって，ある集団に同化するということは，単にその集団を特徴づけている価値を承認することを意味するだけではない。

それは，特定の視座から事象を見，諸概念に特定の意味の陰影を与え，また心的・精神的事実を，その集団固有の形態において，把握するということを意味している。

集団に拘束されているということは，このように前もっておおよそ規定されている方式に従って，新しく出現する印象や事件を処理できるような，解釈構成・形態化の志向原理Formungs-und Gestaltungs-Intentionenを吸収することに他ならない」。(9)

また『世界観解釈の基礎』の中で，

「精神的潮流は個々の生活，文化領域の孤立した水路の中を流れ進んでいるのではなく，個々の諸要因は，その時々の局面で相互に影響しあっているのであって，万物流転の究極の基体，現実的な主体にほかならない一つの総体性の部分であり，機能なのである。この総体性の構造あるいは形態（ゲシュタルト）を，それらの個々の周到な研究によって明らかにしていくことこそ，普遍的，形而上学的，方法的原理として，すべての精神諸科学のなかに地歩を占め，宗教学と同様に芸術学を，理念史と同様に社会学を支配している『歴史主義』の究極目標なのである」。(10)

そしてマンハイムは，「新しい科学の可能性」を構築するために「想像（imagination）に基づいた構造主義」を主張する。

「社会的現実を認識するためには想像（imaqgination）」を，しかもある特定の種類の想像をもたねばならない。その想像は，虚構を生み出すのではなくて，構造連関の直観的把握に基づいて，一見連関がないと見える事実を関連させるがゆえに，私は，その想像のことを，『実在論的』と呼びたいと思う。つまり，この直観的把握のみが，いかなる事実も，最も偶然的な事実さえも適合する枠組みを見ることをわれわれに可能にしてくれるのである。(11)

新しい科学の可能性を構築しようとする試みは，未だ十分なものではないにしても，きわめて重要である。なぜなら，科学もまた進歩するものだからである。

畢竟，科学というものは，どのような構造を，どのような場で構成・構築するかにかかっているが，「言語」というもの以外に構造を認めない，近年の社会哲学を導く「言語学的構造主義」，精神の構造に対する基礎としての脳の神経組織のみを普遍的と考える「発生論的構造主義」も，各々の場では有効性をもちえると考えるが，マンハイムの主張する「生命的構造」に着目してこそ，つまり前述のハックスリーの実践重視からもわかるように，人類の進化は促せるのではないか。

「意識化」や「広大な無意識」を秩序化する努力が，最終的には不可欠だとしても，構造主義にとって緊要なことは，人間の成長と発達が，まず物界に適応することから始まり，次に「情動的世界」，「言語と心の世界」，それから「超越界」へと進行することを銘記し，多次元を重層的に包含する体制をつくりあげることではなかろうか。

３－２－５　科学（学問）の最重要概念としての「ゲシュタルト」について

前所において，K．マンハイムの「社会的ゲシュタルト」について言及したが，ここでは，「科学（学問）」上において，一般的に，ゲシュタルトがどのような意味をもつのか考えてみたい。

一般的に，ゲシュタルトの概念は，「解剖学」の見地から，臓器の形を表わすものとしてよく使われている。また，事故によって腕を失った者が，しばしば「もうすでに無くなったはずの腕の感覚」を感じて苦しむという「幻影肢」の現象も，一種のゲシュタルト現象である。さらに水槽に，フグとそれよりも大きな獰猛な熱帯魚を入れてみても，この獰猛な熱帯魚は，フグを食べようとする寸前で，その捕食活動を止めてしまうという事実も，ゲシュタルトが作用しているのだと言われている。雲の形，地球の形，生物の形，結晶の形，分子の形などの自然現象もそれである。また心身医学の祖であるV.v,ヴァイツゼッカーの治療概念の源である「根源的ゲシュタルト」（Gestaltkreis）も忘れてはならないだろう。

このようにゲシュタルトの概念は，きわめて多義的であることは興味深い。

ランスロット・L・ホワイトは，「ゲシュタルトとは何であるか？」という問いに対して，以下のように答えている。(12)

（１）専門分化した知識に新しい統一と秩序をもたらす概念
（２）永続性より，変化やプロセスを表現する概念
（３）物質と精神という二元性（原因の一部は言葉にある）の背後にひそむ単一のプロセスを明らかにする概念
（４）あらゆる領域において部分と全体の関係に光

明をもたらす概念

つまり，「物質・精神・生命」の三つの領域の基本法則やそれらの相互関係において，科学（学問）は何を語れるのであろうかを考える際，ゲシュタルトは，なくてはならない「至高原理」なのである。

物質界に限ってみても，たとえば，結晶における原子や分子の線的配列，組織における原子の連鎖，そしてまだ解明されていない部分が多いが，遺伝子やウイルス，有機体の各部位に見られるかなり優位な配列など，例はいくらでもある。

ほとんどの場合重要なのは，パターン，すなわち，配列である。個々の粒子は見分けがつかず，アトランダムに出たり入ったりしている。実際，粒子の唯一の役割は，パターンを形成することにある。われわれが実際に観察できるのは，パターンであって，粒子ではない。「形態（ゲシュタルト）」すなわち物質の背後にある新しい意味での構造的パターンは，個としての特徴をもたないその構成要素よりも重要である。

「生命」は，パターン（形）を通じて，無秩序を秩序へ向かわせようとしているのである。

そして「進化への生命意志」が，「構造」を構築することを，ここで再び確認しておこう。(13)

（1）安定した構造はプロセスの最終段階であり，そのプロセスを記録する役割を果たす。

（2）安定した構造が事態を支配する。なぜなら，不安定なものは消え，安定したものが残るからである。

（3）不完全な構造には，ある不安定性さがともない，自らを完成へ向かわせるか，崩壊させるかのどちらかの傾向を示す。

（4）ある構造の存在は，それと同一または類似の，あるいは相互補完的な構造の形成を促進する。一個のモデル（または相互補完的な二個のモデル）は，無数の子孫を生む。

（5）複雑な構造は，類似した構造と選択的に相互作用を行う傾向を示す。

（6）複雑な構造の特性は，パターンを形成する個々の構成要素より，構造的パターン全体の特性によって決められる場合が多い。

上記の「構造概念」が，マンハイムの「構造直観」「ゲシュタルト概念」と自然科学系と人文・社会科学系の違いはあるにせよ，きわめて類似していることは間違いがない。生命・自然・精神を統合する「至高の原理である原理」であるゲシュタルトを考究する際に，併せて，重要な概念として，前述した「「想像（創造）力」，「アナロジー」，「直観」，「生命意志」，「進化」」等を再び確認する必要があるであろう。

そしてそれらの複合的・総合的理解は，われわれを真のポスト近代の社会へと導くであろうと考えられる。

Ⅳ．人間科学における「社会学的定位」について

文科系側からの人間科学において，主要な学科となりえるものに，「社会学」がある。なぜなら，社会学は，「個人の尊厳」を斟酌しながらも，「人間関係」，「ネットワーク」考究の学問だからである。真実なる「学問的認識の立場」も，実は，個人による濃密な人間関係のネットワークから構成・構築されるものではないだろうか。

現在の人間科学における「社会学」の最大の課題は，「どういう理想的な地域・世界社会を構築するか」にある。つまり，「詳細な理想社会を生き生きと想像する」という行為は，「現代社会学」（とくにスコラ学に陥った「現代社会学理論」）が，「図像化禁止」（Bildverbot）を採用し，もっとも不得意としてきたものである。

われわれはこのような状況を打破しなければならない。

このような問題意識において，以下，（1）「計画論」（「未来学的思考」「民主的リーダーシップ」「人間形成＝教育の問題を含む」）（2）「世界の諸問題」「社会体制」の問題（3）「プロデュース学としての社会学」等について述べたい。

4－1 「計画論」について

社会学は，社会現象の複雑さを縮約しうるようなコンパクトな概念体系の析出に成功してこなかった。社会学における中心的な説明変数，被説明変数が何なのか，どのよな条件を満たせば，妥当な社会学的な説明たりうるのか，残念ながら，これらの問題に対して定説的なものは確立していない。

しかし，そもそも，上記のような「近代主義（線形）的」な発想では，「計画論」は成り立たないで

あろう。

「現代社会の包括的でシステマティックな構造分析」とよべるような研究を，日本・世界の社会学はもちえているだろうか。否である。

専門分化の進行とともに，階層研究や都市社会学，女性学，社会史など連字符社会学的な個別領域での研究の進展はいちじるしいが，個別領域を包含し総合するような新たな枠組みの欠如が印象づけられる。

ルーマン，吉田民人，今田高俊などは，それぞれ「自己組織パラダイム」を提唱しているが，ともに方法論的なレベルにとどまっており，「自己組織性」の理論と現状分析をどう結びつけるかは今後の課題である。

現代社会の「自己組織」にあたっては，学際的な総合性が求められるとともに，「政策科学的志向性」を欠かすことはできない。「K．マンハイムの時代診断学」のひそみにならえば，第三に「時代診断学の政策科学としてのマクロ社会学」という規定が不可欠である。

コントが「予見するために見る」といったように変動する産業社会が不断に生み出す個別の社会問題の診断と克服が社会学の草創期からの課題だったと言えるのではなかろうか。

４－１－１　K．マンハイムの「教育計画論」と「政策科学」・「未来学」

ここではまず，K．マンハイムの「教育計画論」に言及する前に，現在の「政策科学」の状況にまず言及した上で，K．マンハイムの「教育計画論」について述べたい。その後,「未来学」について触れ，マンハイム計画論とそれとの融合を提唱したい。

現在,「政策科学」を成り立たせている社会学理論として，1．「実証主義」，2．「現象学的社会学」3．「批判的社会理論」の三つがある。

「政策科学」の運動には，哲学，政治学，行政学，経済学，経営学，経営科学，社会学，心理学，情報科学など多くの専門科学が参加しているが，これらの諸科学は，研究の視野，評価基準，データ，推論方法が異なっているため，政策科学として一つにまとめることはなかなか困難である。

しかしにも関わらず，政策科学の将来への期待には，相変わらず大きなものがある。その期待は，政策科学のフレームワークや方法論の整備および「科学哲学的，認識論的な考察」に基づいた政策科学の方向付けの試みに現れている。政策科学が期待を裏切ってきた原因の根底には，それがとってきた合理的，技術的方向を支持する「実証主義」の認識論と「科学哲学」がある。

通常，政策科学の言語は，実証的社会科学の言語であり，その関心は，因果関係の確立をめざす数量的なデータの計測にある。この研究の範疇に属すものには,「便益費用分析」,「数学的シュミレーションモデル」,「多元回帰」,「システム分析」,「実験計画」,「サーベイリサーチ」等がある。

（くりかえしになるが），しかし往々にして，社会の「複雑性」は，近代科学が依存してきた「線形の数学」で縮減しきれるものでないことは，現在，明白な事実として認めなければならない状況となっている。

また,「普遍妥当法則」の探究は放棄するが,「実証主義的方法」には信頼を置くという「新実証主義」においては,「研究の評価基準」が暗黙のうちに変化し，今では「特定の状況における観察結果」と「理論による事後的説明」との間の一致を目指すという考えになってきている。

さて，これらの閉塞的「政策科学」の状況を打開するものが，再三，くりかえし述べている「K．マンハイムの（文化的・社会的）ゲシュタルト」である。

「精神的潮流は個々の生活，文化領域の孤立した水路のなかを流れ進んでいるのではなく，個々の諸要因は，その時々の局面で相互に影響しあっているのであって，万物流転の究極の基体，現実的な主体にほかならない一つの総体性の部分であり，機能なのである。この総体性の構造あるいは形態（ゲシュタルト）を，それらの個々の周到な研究によって明らかにしていくことこそ，普遍的，形而上学的，方法的原理として，すべての精神諸科学のなかに地歩を占め，宗教学と同様に芸術学を，理念史と同様に社会学を支配している「歴史主義」の究極目標なのである。」(14)

（＊最後の「歴史主義」とは，フリードリッヒ・マイネッケによって基礎付けられ，トレルチの，近未来に開かれた「現在的文化総合」（歴史認識は未来を意欲し積極的にはたらきかける主体によってはじめて可能となるという立場）へと続き，K．

マンハイムの「計画論」へと流れ込んだ，一緒の「変動的構造主義」であるが，これは文系の「進化論」とでもよぶべきものである。）

以上のゲシュタルト論を受けて，マンハイムは，政策科学の基礎となる「創造的政治学」を首唱する。[15]

「創造的政治学は創造的科学と異なるものではない。創造的科学は，精神が既成の型から離れるところにはじまる。科学者は，原理的には自然に基礎を置きながら，これまで自然の中には存在しなかったように道具を自由に考案する。もしわれわれが自由な計画社会を考える場合には，われわれは未だ実現されていない目標を自分で設定することになる」

マンハイムにとって，現代の科学は，依然として，「部分的思考」の段階にとどまっている。社会生活における現実の葛藤と結びついている実践的な生活設計においては，ますます煩雑で複雑な「相互依存的思考」によって問題を追及せざるをえなくなっている。

このような相互依存的思考に基づき，マンハイムが後半期において案出・発見したものが，さまざまな活動系列の部分的状況と一回的な発展から統合されるような具体的な連結における普遍的な諸力であり，実質的明証性をめざす，動的全体性（dynamic totality）である「中間（媒介）原理」（principia media）であった。

ところで，マンハイムの計画的思考の要をなすものが，「鍵となる立場」（the Key position）である。これは社会的思考のための新しい可能性をもっているので，この立場からは即時的な効果だけでなく，はるか前方の効果も見積もられる。この際「計画のためのヴィジョン」が重視されることになる。このヴィジョンの形態化した枠組みが「中間（媒介）原理（principia media）」といえよう。

この形態化（ゲシュタルト化）において，因果系列の観察の可能な最初の部分が構造的に補足され，作用が均衡しあっている証拠として構成される一種の循環運動が生じる。前期の発明的思考の段階においては，始まりのある直線的な因果系列と考えられていたものが，因果系列の最初と最後の項がない二重の閉鎖的な円と考えられるようになった。そして最高の発達の段階では，さまざまな遠隔作用が内部で従属し合い，閉鎖的な循環運動を構成していると以前は考えられていたものが，「多元的な構築物」をなすものと想定されている。

マンハイムの計画論において「人間の変革」は最大のテーマであったが，彼の人間科学の三本柱は，１．精神分析・社会分析，２．行動主義（現代的にいえば「認知心理学」）３．「実践主義」であった。

以前は，個人の心的生活において，潜在化され自然力のように作用したもの，すなわち無意識界の適応や誤った作用をも規制しようとする大胆な試みが行われなければならない。

最も広い意味で，教育は，直接の目的として関係のない，いろいろの事物によって，人間の性格と能力の上に生み出される間接的効さえも内包している。つまり，教育は，政治形態，産業技術，社会生活様式，いや人間の意志に拠らない自然の諸事実，気候，風土，地理的位置によって，人間の性格と能力の上に生み出される間接的効果さえも含んでいるのである。[16]

これまでとってきた教育に対する態度は，ただ組織の中で相応の働きをする「専門家教育」だけだったが，現代の教育体系においては，ただ単に能力や知識や技能を意識的に形成させるという「狭義の教育」だけでなく，これまでは成り行きに任されてきた，「性格形成の原理」をも形成しようとする試みを，同時に始めなければならない。これを，マンハイムは，「広義の教育」と呼んでいた。

マンハイムにとって，「真の計画」とは，「制度」と「教育」と「価値」との心理の調整にあると考えていたのである。

彼の「理論設定の精髄」は，急激な変革期である危機としての現代を救うためには，「どのような人材が養成されなければならないか」。どのような「人間形成の志向性」が確立されねばならないか，ということであった。また，これらの活動を促す，「民主的リーダーシップ」（「脳研究」における「前頭前野」の研究も，人間の「計画的思考」やリーダーシップ，コミュニケーションと関連していることは興味深い）にも関心を示し，「民主的権力」の問題として熟考していた。

マンハイムは，「権力過程をどうやって支配するか」の中で[17]（１）権力過程を支配する統制は必然的に全体的なものでなければならない。（２）種々の権力過程がそれぞれの段階で適切な手段に

よって取り扱われなければならない。－中略－組織を設定し計画するにあたって，個人間の関係を円滑にするという，中心目的を見失ってはならない。（３）われわれの規定はさらに，制度的統制それ自体が必ずしもつねに非人間化するものではないということを，われわれに教えることはできる。（４）われわれの区別は，同様に権力の集中と分散を検討することを可能にする。権力が集中されるべきか否かは，またどれだけ集中されるべきかは，もちろん関連する機能の性質とその構成による。

ところで，近年，ＮＧＯ活動，ＮＰＯ活動は，さまざまな批判はあるものの一定の評価は得てきている。ＮＰＯの活動分野を見てみると，１．教育　２．子どもの生活　３．保健･医療･福祉　４．地域まちづくり　５．文化・スポーツ　６．環境保全　７．人権の擁護　８．国際協力　９．災害救助活動　10．男女共働参画，がある。

それは，まさに，マンハイムの「広義の教育」の具現機関とみなすことができるし，それはまた，日本に欠如している「政策形成産業」の勃興・発展を促すものである。

そして，究極的には，学問研究における真の（interdisciplinary,multidisciplinary）な研究を確立することになるのではないか。

また，新しい計画論においては，「未来学」からの業績を活用することも忘れてはならないだろう。「世界未来学会」。「日本未来学会」の活動を顧慮せねばならないし，フランス（未来図書館），オーストリア（未来研究所），ドイツ（ベルリン未来研究センター），イタリア（応用経済リサーチセンター），フィンランド（未来研究協会），ノルウェー（平和研究所国際未来研究連盟）など，諸外国の動向も注視せねばならない。とくに，ウィリス・ハーマンの「人間の問題を解決するためには，それが含まれる全体の問題を把握してかからなければ効果がない」という，holistic alternative futuresの考え，彼の開発した「カウンセリング」の方法は，対抗同一性の問題にかかわりすぎる日本の臨床心理学と比較すると，きわめて肯定的なものであり，マンハイムの「計画論」とともに，これからの斯学の進歩を進めていくものであろう。

４－２　「世界の諸問題」および「社会体制の問題」

日本および世界の差し迫った諸問題として以下のものが挙げられるだろう。
（１）高成長の終焉，（２）世界に先駆ける高齢化，（３）技術の大幅な革新による社会の変容，（４）長期的により厳しくなる環境制約，（５）地球規模での市場の一体化と多極的国際システム時代の到来。

上記の諸問題を解決するためには，現在の日本は，改革が進みつつあるとはいえ，「部分最適型の社会」であり，日本は良い意味でも悪い意味でも「特殊な社会」であるといえよう。日本社会・日本人の社会的性格を表現する際に，よく表現される「間人社会」は，その典型である。

「間人における自己システム」は，共有生活空間の中で，たまたま「自」らに割り当てられた「分」をいい，そこでは，最初から無条件で存立するような自己システムは，設定されていないのである。「間人」間での関係のあり方は，自他間での完結した「社会関係」（social relation）と違う。また人為的な契約問題とも異なり，「間柄」とでも表現すべきものであろう。「間柄」は，確かに社会生活での対人関連を確かなものにする。あるいは円滑にする機能が備わっているが，一方，「進化する社会・人間関係」のなかで働く「創造的革新」を阻害する面もあることは忘れてはならない。

このような観点から日本は，「民主的社会」を再構築せねばならない責務を負っているのである。

グローバル・ネットワークの進展の中で，「国益」もさることながら，いうまでもなく「人類益」を追及する時代となっている。「多文化主義」は，大切な基本テーゼであるが，すべての文化が価値的に等しいわけではない。「相対主義」は，ある時は，文化的堕落・文化的崩壊に，日本を，世界を陥れるかもしれない。「相対主義」ではなく，「相関主義」（所与の具体的社会状況において（道徳的）価値は自ずから決定されてくるというもので，完全な「価値中立」は存しえないというもの）という立場が重要なのである。

「南北問題」も重要な問題である。これは自ずから，既存の「超国家組織」（国連）の改革や，あるいは「新しい超国家組織」の創設により達成されるものなのだろう。その中で日本は，どのような立場をとらねばならないのだろう。

私見によれば，日本は，「新自由主義」ＶＳ「新

社会主義」という二分法的・近代主義的な社会体制を超えた「第３の道」（英国の社会学者ギデンズのそれというより，マンハイムの主張したものに近い）を求め続けるべきである。それは，真の「民主的リーダーシップ」を涵養するものであろう。そして日本は，そのリーダーシップによって，世界の国々の問題を調停していくべきだろう。

またに「メディエーターとしての日本」をわれわれは目指さねばならないのである。

理想社会とはどのようなものなのであろうか。トーニー・ブーザン，テレンス・ディクソンは，『脳の社会学』の中で次のように述べている[18]

（１）自然と生活が一体となった全体的コミュニティー，および人類は一つを強調する倫理観を伴う。
（２）自己開発に最高の価値を置き，あらゆる社会制度の機能は，人間開発に向けられるとする自己実現倫理を伴う。
（３）さまざまな文化やさまざまな個性に合わせて，多レベルで多面的，かつ統合的になること。
（４）狭い国家的な次元（例えば経済）の関心を極大化するのではなく，多次元にたったバランスと調和のとれた満足感の達成。
（５）全体論的感覚で生活を行い，理解すること。
（６）進取の気性に富み，応用がきき，発展的になる。

４－３ 「プロデュース学としての社会学」について　真の「産学協同」をめざして

現代社会は「変革期」である。戦後日本は，「下部構造（経済）」ばかりに力をいれすぎ，「上部構造（価値・理念）」を蔑ろにしてきた。日本は新しい国家理念をつくるべきである。これは国際化の問題と矛盾しない。つまり，国際化・世界化した日本の国家理念を打ち立てる時に来ているわけである。

「社会理念」としては，際限のない「欲望」に基づく，弱肉強食の「資本主義」，悪しき平等主義である「社会主義・共産主義」の立場を反省し，「創造的革新をたえずめざしつつも，助け合いの精神を忘れぬ，生命力に基づく」民主主義国家が，リーダーシップを発揮する平和的世界の構築をめざさねばならない。

技術の偏重ではなく，優れた「文化」を世界に供給・輸出する「文化資本主義国」をつくりあげるべきである。

古い社会構造を壊し，価値観を変革せねばならない。なぜなら，私たちは，「幸福になるために生きている」からである。

以上の観点から，高い「研究・創造力」と「産業力」を結びつけた「共創力」に基づいた「真の産学協同」がめざされねばならない。

日本の主要産業となっていくのは，「ライフサイエンス事業」である。そのための起業ネットワーキング戦略を，さらに進めていくべきである。ＩＴ産業におけるボストンのルート128地域やカリフォルニアのシリコンバレーをモデルとするが，それらを超える「人間形成（教育）・産業特別区」をつくり，その思想・構想を日本・世界の他地域に移植するべきである。

「創造性（メタ想像性）」が，「脳の研究」「人間の思考」「社会」において，いかに大切かをくりかえし前述した。

創造的な個人も，人と人とのネットワークなしには，創造性を具体的な運動や成果にまで発展させられない。人的ネットワークを通じての相互接触は，「知識の創造・学習と情報・資源の動員」という実利的目的と超えて，「自分も皆と共通の，ある場に属している」という所属感や心理的なコミュニティー（共同体）感覚を提供するものでもある。

Ｖ．進歩（化）学としての「子ども学」

「不登校」「いじめ」「学級崩壊」等は，今や半ば当たり前のこととして，ニュースにもならなくなっているのが現況ではなかろうか。しかし，そのような危機の中でも「時代・社会の再建」の足音は，確実に聞こえているような気がする。

21世紀において，日本は大きな使命をもっている。その使命とは，前述した「間人主義」と西洋的な「個人主義」を調停するというものである。これからの日本は，世界の「中庸」を体現する国家となるべきではないか。

そして，その基礎作りとして重要となるのが，家庭教育を受けて，幼稚園教育・保育所教育，そして学校教育へと連なる「子ども教育」だと考えられる。

これからの「子ども教育」には，よき日本人に

なるだけでなく，良き世界人を育てる責任がある。「鉄は熱いうちに打て！」「三つ子の魂百まで！」という厳格な「父性原理」と，どこまでも暖かく包み込む「母性原理」をともに生かすことが，とくに「子ども教育」には必要であると思われる。

幼児教育の大家であるマリア・モンテッソーリは，次のように主唱している。

「実際仕事をしている人間であり，苦しんでいる犠牲でもある幼な子，また人生の歩みにおいて私たちの支えであり，より良い仲間である幼な子は，いまだ知られざる人間像であります。人類の歴史において，この人間像については，まだ，何も書かれていないのです。」(19)

５－１　「子ども学」における「メタ想像性（創造性）」＝「集中力」の重要さ

「メタ想像性（創造性）」が，人間の思考力において大きな役割をもつこと，つまり「思考力の統御（コントロール）」を行っていることは，既に，指摘した。そしてこれは，「人間の脳」の最も重要で人間的な部分である「前頭前野」と大いに関係している。この部位は，「計画」，「他人とのコミュニケーション」をも司り，おそらく「社会での民主的リーダーシップ」にも影響を与えるものである。

また，「前頭前野」には，意識的な身体運動や知的な働きの中枢があるといわれているので，「集中力」との関係も深いであろう。循環的な言い方になるが，必然的に，「メタ想像性（創造性）」＝「人間の思考の統御（コントロール）」＝「集中力」という図式になるであろう。

前述の幼児教育の大家であるマリア・モンテッソーリは，この「集中」に着目している。彼女は，子供が本源的にもつ特性は，「集中」において現れるという。はじめこれを，モンテッソーリは，「注意力の分極化」（Polarization der Aufmerksamkeit）（日本語訳では普通，「注意力の集中」と訳される）と呼んだ。彼女は，後年の著作では，これを「正常化」と（Normalization）表現しなおしている。

彼女によれば，「集中」とは，「事物＝対象との関わり方の問題」であり，「事物の仕組みや構造を把握すること」（本論文でも，くりかえし「構造」の重要性を指摘した）である。モンテッソーリの幼児教育論によれば，幼児の道理にかなったあらゆる形態の活動に注意を払い，それらを理解するように努めることが重要である。幼児の活動に対する意欲を，できるかぎり，援助しなければならない。しかしこれは，幼児のために何でもやってあげることではなく，幼児のもっている自発的な力を引き出してあげることである。幼児は，私たちが考える以上に，外部からの影響に対してきわめて敏感であるがゆえに，幼児との接触においては，きわめて慎重であるべきである。

幼児は，心の内部にある「精神の構築計画」と「自己開発」のために，あらかじめ設定された綱領を意のままに使いこなしているのである。モンテッソーリは次のように述べる。(20)

「自我の主導によって動く能力が，子どもを一つの事物に集中させます。そしてこの集中力は，子どもの内面的な生活に起源をもっているのです。本当に正常とは，動作を発するにあたって注意深く考えて深く行う能力なのです。この能力にこそ，子どもの内面の規律といってよい秩序が表われます。

外面の動作の規律は，秩序感を中心に形成された内面の規律が表出したものなのです」発展というものは，いかなるものでも，複雑な「進化過程」を経て行われるものである。人間も長い時間をかけて知的存在になるが，同じように複雑な自己形成的過程を経るはずである。しかし，この過程は，今日なお探究されていないと言ってもよい。

現代でもなお，科学的知識による解明という点で，ある空白な場所，未研究の一領域，未知の大領域が残されている。それが「人格性の形成の過程」なのである。

さらに，モンテッソーリは，「宇宙論的な立場」から，発言する。(21)

「教育の諸問題は，宇宙の秩序の法則の上にたって解決されねばなりません。それは人間生命の精神構造の永遠不滅の法則から，地上において現に発展しつつある社会を先導する変幻自在の法則にまで及びます」

この思想が，「梵我一如」の，「精神（霊性）」とは，生命的な源であり，エネルギー，創造性，そして知性の水路である。「心（mind）」だけでもかなり多くのものを達成することができるが，「心」の力が「精神（霊性）」と接触することを通じて，

人間は大きく成長することができる。「肉体」「心」「精神」というミクロコスモスが，「社会的文化」(socio-culture)，「環境」(environment)，宇宙（普遍，universe）というマクロコスモスと相応していなければ，それは「マーヤ」（幻想）にすぎない[22]という考え方と一致していることは興味深いし，これはまた，近来の「精神免疫学」の考え方とも一致している。神庭重信は，以下のように主張している。

「心をもつ私たちの生命システムは，物理・科学的な意味だけでなく心理・社会的な意味でも集団，社会，世界，そして宇宙へとつながりをもち，これらの環境と独立では存在しえない。生命は同時に，下位のレベルでは，臓器，組織細胞，遺伝子，分子，量子のレベルに至るまで，すべて連鎖の中でその営みが進む。心と体の対話は，多くの因子が構成する全体のなかで営まれている」[23]

さて，モンテッソーリに戻ろう。彼女は，『人間形成』という著作の中で，子どもの発達を妨害しているもの，発達を遅滞させているものという，すでに社会に根付いている傾向についての分析を行っている。モンテッソーリは，子どもの自然な発達を妨げるこうした否定的な影響を「オムビウス」とよんでいる。彼女によると，それは「善の様相」を見せているものの，環境に甘んじて暗示の助けを借りて全人類に負わされた「悪」を意味している（この悪は，「業」「遺伝的な病気」のような形で，「家族」の中に刷り込まれている。ことを忘れてはならない）。

言うまでもなく，上記の「悪」「障害」をどのように取り除いてやるかが，「子ども教育の根本問題」といえる。そして，その目標は，何度もくり返すように，「メタ想像性（創造性）」による「自己制御」（コントロール）の養成なのである。

５－２　「子育て支援」と「女性学」
女性を愛し支援することの重要さ＝gentlemanの思想（男性の側から）

まず，少子化の原因を考えてみよう。（１）女性が自分のライフスタイルを変えたがらない。（２）経済的理由によるもの（夫の収入が少ない）。（３）国や自治体の試作が整っていない。（４）マスコミが「少子化スパイラル」を煽っている。（５）自信のない男性（夫）が増えている。

これら多くの問題が挙げられるが，一番の問題は，実は，「自信の無い男性が増えている」ことかもしれない。変革期である現代において，男性も女性も生きる指針を失っている。その自らを律する指針を構築すること，複雑な社会の中で「アイデンティティ」を確立することができないのである。ここでやはり，重要なことは，男性が，「民主的リーダーシップ」を確立して，女性を導くことではないだろうか。

ドイツの文豪ゲーテは，『ファウスト』の第二部の最後で，「永遠なる女性性がわれ等をして昇らしむ」と主張した。

これに関連して，心理学者ユングは，女性の四段階として，（１）物資的女性（精神がまだ物質の中で眠り込んでいる）（２）ヘレナ的女性（個性をまだ十分には発揮していないが，一部目覚めかけている）（３）マリア的女性（精神が聖性に達している）（４）ソフィア的女性（精神が最高位にまで達している。ダヴィンチがモナリザで示そうとしたもの），を挙げている。

いうまでもなく，このような段階・類型にこだわる必要はないし，人は，女性は，もっと自由に成長していくものだろう。しかしその成長を援助するものは誰か！？男性しかいないのである。Gentlemanの思想が必要とされている。

女性にとっては，「永遠なる男性性が私たちをして昇らしむ」なのであるから。

５－３　新しい「保育（幼稚）園運動」の提唱

現在行われている，「保育所」と「幼稚園」の活動を比較してみよう。

保育所の活動，（１）園庭の開放（２）未就園児の親子登園（３）母親との交流会（４）父親との交流会（５）地域への啓発活動（６）地域へのボランティア活動――老人福祉との関わりにおいて（７）学童との交流――小学校と連携した交流（８）特別時間の受け入れ――延長保育など（９）子育て相談（10）そのほか特別な活動または事業

幼稚園の活動　（１）園庭の開放（２）未就園児の親子登園（３）母親との交流会（４）父親との交流会（５）地域への啓発活動（６）地域へのボランティア活動――親子清掃など（７）学童（小

学生）との交流－－同窓会，学童保育ほか（８）特別時間の受け入れ（９）子育て相談（10）そのほか特別な活動または事業，以上である。

両者を比べて見ると，日常の活動において，ほぼ同じことを行っていることがわかる。この事実からも，「幼稚園」と「保育所」との統合，つまり「幼・保の一元化」の問題が出てくるのもうなづけるのである。

ほかにも以下の問題がおさえられるべきであろう。

（１）幼稚園・保育所の国際化の問題
（２）人間のライフサイクルにおける家庭の意味・意義
（３）社会的エネルギー源としての家庭
（４）世界各地にみる子育て文化とファミリー・サポートの方法

また，異年齢集団のつきあい，シブリング・グループ（sibling group）の意義も評価せねばならない。

幼い子ども達は，自分より大きな子との関係，自分より小さな子との関係，同じくらいの子ども同士の関係といった多様な人間関係の中で，心身の成長を，昔は遂げていた。ところで，スウェーデンなど，北欧の国々の保育園では，子どもたちのグループ構成は，一般に，この「シブリング・グループ」になっている。「シブリング」とは「きょうだい」の意である。これは人間生活の自然の状態に近いものである。わが国では少子化が問題になっているが，それだからこそ，園生活における異年齢児同士のつきあいには貴重な価値があるといえるのではないか。シブリング・グループの長所として以下が挙げられる。

（１）自己認識に導く（２）自然体の人間関係をめざす（３）立体的な人間関係を描き出す（４）保護者の会話を豊かにする（５）やさしい心をはぐくむ（６）人間存在について考えさせる。

また，新しい「保育（幼稚）園」は，「ファミリーサポート機能」をもつことが首唱されていることも忘れてはならないだろう。

各家庭のもつ長所を生かしつつ，その短所を矯正することが大事であり，悪い「世代間連鎖」をいかに打ち破るかが，保育・教育そして福祉の最大の課題となるであろう。

注及び引用文献

1. T.G.ウェスト 著　久志本克己 訳 『天才たちは学校がきらいだった』 1994　67-69頁
2. E.O.ライシャワー 著　山下篤子 訳 『知の挑戦』 講談社　1998　14頁
3. 同書　14-15頁
4. T.H.ハクスリー 著　長野敬他 訳 『進化とは何か － 20億年の謎を探る』 講談社　1968　18-19頁
5. K.マンハイム 著　森良文 訳 『世界観解釈の理論への寄与』 潮出版社　1975　68-83頁
6. 同書　87頁
7. K.マンハイム 著　大河内了義 訳 『ルカーチ〔小説の理論〕批評』 潮出版社　1975　12-13頁
8. K.マンハイム 著　鈴木広 訳 『世代の問題』 潮出版社　1976　198-199頁
9. 同書
10. K.マンハイム 著 『世界観解釈の理論への寄与』 27頁
11. K.Mahnheim. Essays on Sociology and Social Psychology 1953 Routledge & Keganpaul P.190
12. R.L.ホワイト 著　幾島幸子他 訳 『形の冒険』 工作舎　1987　22頁
13. 同書　157-160頁
14. K.マンハイム 著 『世界観解釈の理論への寄与』 27頁
15. K.マンハイム 著 『自由・権力・民主的計画』 潮出版社　1976　52-53頁
16. K.マンハイム 著　末吉悌次他 訳 『教育の社会学』 黎明書房　1964　255頁
17. K.マンハイム 著 『自由・権力・民主的計画』 87-90頁
18. T.ディクソン 著　箱崎総一 訳 『脳の社会学』 1980　104頁
19. M.モンテッソーリ 著　鼓常良 訳 『幼児の秘密』 国土社　1968　6-7頁
20. M.モンテッソーリ 著　中村勇 訳 『子どもの発見』 モンテッソーリ総合教育研究所 2003　34-35頁
21. 同書　77-78頁
22. 入江良英 著 『日本およびバリにおける精神

文化』 東京家政大学紀要　2000　44-47頁
23. 神庭重信 著 『こころと体の対話 ― 精神免疫学の世界』 文春出版　1999　38-39頁